

## ロシア正教会の霊的文献における人間観

渡辺 圭

[Резюме]

Взгляд на человека в духовной литературе Русской Православной Церкви

ВАТАНАБЭ Кэй

В данной статье рассматривается взгляд на человека в духовной литературе Русской Православной Церкви. У каждой религии есть собственное понятие о человеке. Верующий определенной религии решает свое поведение по заповедям своей религии. Христианство есть религия логоса, поэтому просветительная литература всегда имела большое значение. У Русской Православной Церкви также есть такая традиция. В храмах и монастырях Русской Православной Церкви можно приобрести просветительную литературу, которая называется духовной литературой. Ее авторы, как правило являются церковнослужителями. Многие из этих книг были изданы по благословению священнослужителя более высокого сана. Темы весьма разнообразны, например, о христианской вере, о христианской жизни, о церковных обрядах, о праздниках, об учении святых отцов и т.д. В процессе исследования автор уделяет внимание учению о человеке в православном богословии. Там человек изображен как специальная тварь, которая была сотворена по образу и подобию Божию. Через анализ духовной литературы данная статья проясняет особенности понимания человека в Русской Православной Церкви.

キーワード：イエス・キリスト、人間、ロシア正教会、聖師父、長老

### 0. はじめに

宗教とは人間の精神的・文化的・社会的な営みであるが、個々の宗教にはそれぞれ独自の人類に対する視座、つまり人間観がある。或る宗教の成員は、所属先の宗教の教説により世界観を構築し、自らの行動を律していく。<sup>ロコス</sup>言の宗教であるキリスト教は、聖職者による口頭の説教と並び、記録としての記述文献を重視してきた。現在のロシア正教会においては、信者の啓発や信仰心の鼓舞を目的とした様々な啓蒙文献が数多く出版されている。「霊的文献（духовная литература）」とも呼ばれるこれらの出版物は、ハードカバーから小冊子まで大小様々な体裁のものが作られ、その量は夥しい数にのぼる。この状態を、コンスタンチン・パルホメンコ司祭（1974-）は「正教文献の海」と表現している<sup>1</sup>。書き手は主に聖職者であり、種類としては、基礎的な教義に関するもの、祈りや儀礼について解説したもの、聖人の伝記や言葉を収めたもの等が挙げられ、これらは、聖堂、教会内部の一セクション、あるいは個別に設けられた教会施設内の物販店で購入することが出来る。総主教をはじめとする高位聖職者の祝福、ロシア正教会出版評議会の推薦の

有無が主に靈的文献として選定されているものの一つの目安となる。出版元は修道院の出版局などであるが、世俗の出版社のものもある。

ロシア正教会の啓蒙文献＝靈的文献において重要な役割を果たすのが、「聖師父たちの教え」である。東方正教会では、聖書以外に口頭の伝承、そして「聖師父たちの教え」が教義を形成している。優れた言語運用能力を有し、キリスト者としての自らの靈的体験を反映させ、正統なキリスト教信仰の在り様を説いた教会の著述家が聖師父である。正教会においては、古代から近現代の教会著述家たちに「聖師父」の呼称が与えられ、その言説は信者の信仰を深める上で重要なものとされる<sup>2</sup>。聖師父たちの多くは「聖人」として列聖されている。修道院や教会では偽ディオニシオス・アレオパギテース（6・7世紀頃）の位階論<sup>3</sup>、シリアの聖イサアク（640年頃-700年頃）の禁欲苦行の言葉<sup>4</sup>、ダマスコのイオアン（676年頃-748年）のイコン崇敬論<sup>5</sup>、新神学者シメオン（949-1022年）の神秘神学<sup>6</sup>等の聖師父の著作が小冊子等のコンパクトな形で入手可能である。本稿で取り上げるロシア正教会の聖職者たちも聖師父の教えに基づいている。聖師父たちの教説はロシアの長老たちに連綿と受け継がれたのである。

筆者はロシア正教会の基本的な世界観に関する知識を深めるために靈的文献の収集・精読を行ってきた。その作業の過程で注目するようになったのが、ロシア正教会の啓蒙文献の教説における人間の位置づけである。そこでは、絶対者である神を措定することにより人間存在の根本的な意味が問われ、語られている。それらの教説により人間の成すべきことが示され、神の御心に叶う信仰者の見本としての聖師父たち、長老たちの言葉が信者の靈的成長を促す心の糧となっている。本稿の目的は、現代ロシア正教会の啓蒙文献における人間観を考察し、その特徴の一端を浮き彫りにすることにある。「人間存在」という観点から、紙幅の許せる範囲で様々な靈的文献を概観していく。

### 1. 前提：特別な被造物としての人間

ロシア正教会は、自らを唯一無二の、正統オーソドックスキリスト教と位置付ける。その歴史は以下のような流れになる。正教会の見解では、1054年に東西教会の大分裂が起り、ローマ・カトリックがオーソドックス正統教会より枝分かれする。そして宗教改革によりローマ・カトリックよりプロテスタンティズムが枝分かれし、同派は細分化・拡散していく。しかし、東方正教会は正統オーソドックスであり続け、正教会の独立教会たるロシア正教会もまた同様であると同教会は主張している。

(…)しばしば正教は特定の文化的伝統（例としては、ロシアの、あるいはギリシャのキリスト教）として解釈される。これは正しくない。正教（православие ギリシャ語ではオルトドクシヤ ортодоксия）という言葉は、二つの単語に起源を持つ：オルトス（ортоc）とドクサ（докса）である。オルトスが正しく（правильно）、正確に（верно）、を表すなら、ドクサの方は信じること（верить）、讚美すること（славить）と翻訳することが出来る。私たちには、ご存じのように、正しく讚美すること（правильно славить）—正教（православие）と訳されたのです。ですが、より深いオルトドクシヤという言葉の翻訳—それは正しい信仰（правоверие）、正しい思考（правомыслие）です。正教会、それは、棄損されていない真実の、正しい信仰を保ち、それを自分の子供たちに伝えている教会なのです。<sup>7</sup>（司祭コンスタンチン・パルホメンコ『知ってください：東方正教会』（2001年））

司祭コンスタンチン・パルホメンコ（サンクト・ペテルブルグの近衛兵イズマイロフ連隊名称生の始源たる聖三位一体聖堂に勤務）は、上に引用した著書において正教会にはそれぞれの国で

文化的な違いがあることを認めた上で、外面的な儀礼形式の差異よりも各国の正教会の、信仰内容、教義の同一性を重視している。つまり、正教徒にとって最も重要なのは全正教会に共通する教義ドグマだということである。

教義に対する理解には、自分たち「人間」の本質の把握が必要とされる。東方正教神学の教えでは、人間は神の像と似姿に従って創造された存在である。神の像である人間は、被造物を統治し、被造物に神を「映す」という使命を帯びている<sup>8</sup>。ロシア正教会の靈的文献において人間はその他の被造物と異なるものとして明確に区別される。人間は単なる物理的な存在、動物的な存在とは見做されない。これと関連して、セルビアの克肖者イウスチン・ポポヴィチ（1894-1979年）の言葉の一部を取り上げたい。克肖者イウスチン・ポポヴィチは、ロシア、ギリシャ、イギリスにおける従軍、留学で幅広い宗教的知識を身につけ、数々の靈的著作を著わした。それらはセルビア語からロシア語に訳出され、ロシアの教会で信者向けに販売されている。克肖者イウスチンは、シリアの聖イサアクの認識論を解説した『神認識の道：シリアの聖イサアクの認識論』（2003年）において、物質を起点として人間存在の本質を理解しようとする知的行為に対し、次のように警告する。

人間は自身を物質の助けによって説明しようと試みるが、どのようにしようとも人間がそれに成功することはない。物質の助けによって自分のことを説明することで、人間は最終的に、自身を物質として表わすようになる。現象論の哲学の人間は、どのようにしても、そしてどれ位力を振り絞ろうとも、物質の客観的真實性を証明することは叶わず、それどころか、物質が真理を有しているなどと論証するのである。人間によって人間を説明することを志向しながら、哲学は異常なことをしている：鏡の中で鏡をじっと見つめる、という。<sup>9</sup>

克肖者イウスチンの教えによれば、神を指定することなしに人間存在の本質、世界の本質を理解するのは不可能である。さて、正教会においてキリスト教の基本とされる教義を知る上で重要なのは、Q&A形式の教理問答カチヒージス<sup>10</sup>や、子供の教育を想定して平明に書かれた正教信仰の手引である神の法である。ロシア正教会の教理問答の基盤とされるのは、1913年に聖宗務院の認可を受けたモスクワおよびコロムナの府主教フィラレート・ドロズドフ（1782-1867年）の教理問答である。その第1章ではニケーア・コンスタンチノーブル信経における神の聖三位一体性について説明がなされる。父である神は他の位格から生まれず、発出せず、神の息子は父である神から生まれ、聖霊は父である神から発出する。三つの位格において神が一つであることは、神性の内的な秘密であるために人間には理解不能であるが、キリスト者は疑う余地なき神の言葉に準じてこれを信仰する。ここで引用されるのは使徒パウロの次の言葉である。<sup>11</sup>

神の靈以外に神のことを知る者はいません（1コロ2：11）<sup>12</sup>

絶対自立存在である神は非被造であるが、神以外のものは全て神により無から創造された。天使は靈的存在であり肉体を持たず、不可視の世界・靈の世界は天使に属する。それに対して、神に似せて創造された人間は、魂と肉体を有する。府主教フィラレートの教理問答では「樂園とは何なのか？」という問いには最初の人間の住処として与えられた素晴らしい幸福な園と回答し、「最初の人間たちが住んでいた樂園は物質的であったのか、あるいは靈的であったのか？」という質問には、人間の肉体にとっては物質的であり、魂にとっては靈的である、との答えが返される。魂にとって靈的であるということは、樂園において人間が神と至福の交わりを持ち、

被造物を靈的に觀照する状態にあった、ということである。それでは、何故神は人間を創造したのであろうか。ここでは「神はどのような目的で人間を創造したのか？」という<sup>カチヒージス</sup>教理問答での質問が鍵となる。その問題に対する回答によると、神は、人間が神を認識し、神を愛し賛美し、それを通じて人間が幸福になるために創造したということである<sup>ザコーン・ボージイ</sup> 13。神の法では、人間とその他の被造生命体の差異が強調される。

あなたが小さかった頃、あなたは走り、遊び、寝て、食べましたね。世界にいる生き物全てがこのように生きています：魚たち、昆虫たち、獣たち、鳥たちです。彼らは自分たちが見ているものを理解することが出来ません。猫は単に生きていただけであり、自分の人生について考えるということは決してないのです。猫は、人生について考えることが可能である、ということすら知りません。(…)人間だけが、生きた魂でこのように問いかけるのです：空と大地はどこから来たのか？空と大地が無かった頃、時間はあったのか？それらは一体何なのか？世界にあるものはどんな物で、意味はあるのか？真理はどのように探せばよいのか？いかにして真実に従って生きるのか？偽物の幸福ではなく、現実の幸福をどうやって探すのか？善と悪をどのように区別するのか？人間にとって最も崇高な真理は——神である。14

以上のように、正教信仰の案内図である<sup>カチヒージス</sup>教理問答および<sup>ザコーン・ボージイ</sup>神の法では、神と人間の関係性から教義が解きほぐされている。正教信仰における神という存在についての理解を深めるためには、人間自身の位置づけが重要なのである。

## 2. 原初の間人アダムの墮罪と神人イエス・キリストの贖罪

前出のコンスタンチン・パルホメンコ司祭の教えでは他の被造物に対する人間の完全な優位性が強調される。神は創造のみわざの第6日に自分自身にかたどって人間を創造した(創1:27)。人間の肉体は第5日までに創造された<sup>マテリア</sup>素材である「土」によって創造されたが、人間の不死の魂は完全な無から創造された。人間の肉体は物質の領域、人間の魂は靈の領域のものである。このように、人間はそれまでの被造物とは全く異なった「新たな存在」であった。パルホメンコ司祭は、人間の靈的な魂は人間のみと与えられたものであり、進化の過程で動物の世界から派生したものではないとする(進化論の否定)15。彼は、原初の間人に神が与えたものを、「服従の戒律(заповедь послушания)」とする。服従を意味するポスルシャーニエという語は、修道制の領域では我欲を滅却するための見習い修道士の労役に用いられ、一般信徒においては、靈的指導者への信頼を表わす(本稿第4節)。何故人間は神に服従しなければならないのか？それは、人間自身は神ではなく、神に依存する存在だからである。戒律には以下の四つがある。①生命の増殖(創1:28)②楽園の開墾(創2:15)③世界の認識(動物の命名)16(創2:19-20)④善悪の木の実からは食べてはならないという禁止(創2:16)。人類が服従(послушание)に留まる以上<sup>ルシフ・ア</sup>明けの明星(денница)(イザ14:12)とその他の墮落した天使たちは手を出せないが、アダムとエバは④の戒律を破り、エデンの園から追放されたのだ(原罪)。さて、パルホメンコ司祭は、人間も本能に従う動物と同じであるとする生物学者や人類学者たちに対して、人間は信仰のために死ぬ=殉教というかたちで動物的な自己保存本能を拒絶することが出来ると主張している17。これは、神の像である「自由(свобода)」の発露である。ここでは、神のために死ぬる生き物は人間のみであるという人間観が提示されている。

数々の靈的著作を著わしている長司祭アンドレイ・トカチョフ(1969-モスクワ州オジンツォヴォの聖大バシレイオス聖堂に勤務)の『心の宗教』(2015年)においても、被造物としての

人間の特殊性が主張される。この小著において長司祭アンドレイは、ザドンスクの聖チーホン（1724-1783年）の言葉を参照し、人間の精神活動の全ての根拠であり、神を感じ、神と出会い、神に祈りを捧げる場としての「心（сердце）」を重視している。

現代の哲学者の一人が訊ねた：人生とはそれを生きるに足るものなのか？カンガルーも蝶もこのような疑問を自身に課すことはないだろう。本能のみで生きるいかなる生物も自身の存在について思索したりはしない。人間には通常物質や存在から自分たちを連れ出す何かがある。何らかのものが人間に自分の人生について思考することを定言的に要求するのである<sup>18</sup>。

長司祭アンドレイは、帝政末期、皇太子アレクセイの血友病治療を期待されていたクロンシュタットの聖イオアン（1829-1908年）の譬え喩を引用し、雌鶏が卵を産んでも長い時間温めなければ孵化しないように、それはまだ雛ではない、人間も同様に、二度生まれなくてはならないと述べている。初め人間は、狼に育てられた少年のように動物の子供である。後にその動物の子供は人格的存在に、理性ある人間に、恩寵によって神の息子になる。二度生まれない人間は、卵のままだとされる。『ルカによる福音書』の「放蕩息子」のたとえが「二度生まれ」を分かり易く表現している（ルカ 15：11-30）。長司祭アンドレイによれば、意識的な、理性的な生のための覚醒は、死者からの復活と比較することが可能である。大変多くの人々がキリストの名を聞き、彼の言葉を読み、彼の秘跡を味わい、新たな生によって飛翔することを通じて、復活したキリストが私たちの世界に自身の確固とした存在を顕わす、ということである。死んだ人生のまま冥府に横たわり続けるということは、キリスト者の信仰を無駄なものにしてしまう。イエス・キリストの復活は、人間の生を根拠づけ、人間の生に意味を与える<sup>19</sup>。

長司祭アンドレイは、罪深き人類を救済するために神人として到来したイエス・キリストは、その独特な唯一の受肉によって、贖罪の死と復活によって、私たち人間は永遠であり、特別な存在である、ということをして理性に対して開示するのだと語る。注目すべきは、彼が論じる正教の死生観である。イエスの受肉、磔刑、復活が一度限りのものであったように、人間の生は一度限りであり、輪廻転生はない。魂は永遠であり、敬虔なキリスト者は復活するため、死後完全に無に帰することも無い、と長司祭アンドレイは説明する。ここでは輪廻転生の概念と唯物論が同時に否定されるのである。

小冊子『罪およびそれとの闘い：聖師父の諸著作に沿って』（2016年）によれば、被造物である人間は、非被造物つくられざるとは二つの隔壁によって区切られている。一つは本性の違いによって、もう一つは原罪という罪によって。しかしイエス・キリストは受肉によって自身の中に神性と人性を一致させ、一つ目の障壁を、十字架上の死＝贖罪により二つ目の障壁を取り除いた。そして彼は五旬節に罪からの浄化における生きた助けとして、聖霊の恩寵を使徒たちに贈ったのである<sup>20</sup>。しかし神は人間自身抜きで人類を救済することはない。何故なら、罪は人間の中に生き続け、神と人間を切り離そうとするからである。このように、被造物としての人間の生の営みは、絶えざる罪との闘いにある。人間の罪は人間の欲望の数ほど多種多様である。カトリック神学には、七つの大罪（「傲慢（superbia）」、「強欲（avaritia）」、「嫉妬（invidia）」、「憤怒（ira）」、「色欲（luxuria）」、「暴食（gula）」、「怠惰（acedia）」）という概念がある。東方正教会の伝統では、これらの七つの罪は「死の罪（смертный грех）」と呼ばれている。「死の罪」とは、人間についての神の企図を歪める許されざる罪のことである。

### 3. 人間の組成：霊・魂・肉体

第2節までの考察によって、ロシア正教会の啓蒙文献においては、人間が特別な被造物であり、墮罪によって罪との絶えざる戦いに投げ込まれたことが確認された。この節では、原初は不死の存在として神に似せて創造された「人間の組成」について論じてゆきたい。ロシア正教会の啓蒙文献では、人間の組成について知識を得ることは、絶えざる罪との闘いにおいて有効だとされている。ここで今一度人間の創造の問題に立ち返りたい。

外科医であり、スターリン勲章を授与されたシンフェローポリおよびクリミアの大主教ルカ（ヴォイノ＝ヤセネツキイ、1877-1961年）は、著書『霊・魂・肉体』（2017年）において、現代の物理学・力学における「エネルギー」に関する知識は不断に更新されるものであり、やがて未知の「非物質的エネルギー」が見出されるのではないかと主張する。彼によれば、正教信仰を持つ者は、物質自身を貫くエネルギーの、全ての物理的な形態の第一根源、「純粹に靈的なエネルギー」の存在を確信する。正教徒にとってそれは、神の全能の、愛のエネルギーである<sup>21</sup>。大主教ルカは、愛とはそれ自身の中にあるものではなく、誰かに対して、何かに対して流れ込みたいという欲求であり、この欲求により、神は世界を創造したと語っている<sup>22</sup>。

御言葉によって天は造られ、主の息吹によって天の万象は造られた。（詩 32：6）

愛のエネルギーは、全き善である神の意志に沿って流れ出るものである。神の言ロゴスにより、その他全てのエネルギーの形態に原理が与えられ、それらは当初物質の粒子であったが、その後全ての物質世界を創出したという。これが「流れ出る愛のエネルギー」の第一側面である。もう一つの側面は、流れ出る神の愛が全ての靈的世界、天使的存在の理性の世界、人間の理性、そして靈的心理的な全ての世界を創造したということである<sup>23</sup>。

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。

「光あれ」（創 1：1-2）

主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。（創 2：7）

「いぶき霊（дух）」という存在は、創造に関わっている。神が人間を創造したとき、神は人間に息ドゥーフを吹き込んだのだ。神が有機生命体に命としてめぐらせたのが霊である。大主教ルカは、心理というものの根源全てを大脳と神経系に還元するという「俗悪な唯物論（вульгарный материализм）」に抗して、霊の重要性を強調する。人間の疾病には心理学的要素が大きいと言われるが、心の動きがすべて生理学的に説明されるわけではない。ある病に罹患している人間は、それを治療する医師との信頼関係によって回復を目指す。大主教ルカは、それを「靈的作用（духовное воздействие）」と称する<sup>24</sup>。心理というものが大脳と神経系の作用であるとしても、その動きの前には霊のゆらめきがある。つまり、心理において、身体器官へ最初のインパルスを与えるのが霊なのである。等しく霊を有する者同士のコミュニケーションが、患者と医師の治療行為となる。

大主教ルカによれば、霊は物質化する（материализация духа）。カトリックの聖地であるフランスのルルドでは、医学的に不可逆的な身体的傷害を持つ信者が、祈りによって治癒される。こ

これは、靈の働きである。大脳や神経系の動作は時間など数値で計測可能だが、靈は時間の外にある（вне времени）存在である。大主教ルカは、興味深いエピソードを紹介している。第二次世界大戦の最中、物理学者 H 教授は、夏の間ウクライナのある村で過ごしていた。とある晩のことである。彼が住居の玄関まで来たとき農家の家主が牛を外に出すために門のところまでやって来た。突然彼女は立ち止まり、両腕を跳ね上げ、叫んだ「ペトロ！」。後に H 教授が聞いたところでは、戦地にいるはずの息子がそこに現れたということである。家主の息子は、まさにその日に戦死していた<sup>25</sup>。大主教ルカの思想に準ずるならば、これは息子の靈が何らかの形相化をなした、と解釈されよう。

靈が物質を規定するだけだというのは狭く根拠の薄い主張である、何故なら、逆の影響、神経系—心理的器官を通じた靈の肉体的物質に対する靈的作用（духовное воздействие）を認めることが不可欠だからである。

靈は成長のプロセスの基盤となり方向づけながら物質的肉体の形態を創りあげるだけではなく、自らその形態をとる—物質化することが可能となる。<sup>26</sup>

知性は脳という肉体器官に属し、知性と靈は相互依存的な関係にある。しかし、知性は靈ではない。知性の靈に対する関係は全体に対する部分のようなものである。逆に言えば、靈が知性よりもはるかに全体性を有するものであろうとも、知性の中にも靈全体を見ることは可能である<sup>27</sup>。神から人間に吹き込まれた靈は肉体の五感を超えたものであり、キリスト教の聖人による予知や透視などは靈の力によるものだということである。

次に人間の「魂（душа）」についてであるが、大主教ルカは生理学的な見地から議論を展開させていく。彼によれば、生理学においては、人間の意識、心理的な活動は、すでに発生したものの、絶えず生起するものに対する無条件反射及び条件反射の巨大なシステムであり、外界からの刺激に対する回答としての活動を促す反応を形成するために、感覚受容体によって脳にもたらされた様々な知覚の膨大なネットワークである。意識は、活動（акты）、状態（состояния）、規模（объем）の三つに分けられる。

意識の活動は、孤立したものではなく、思考は常に感覚を伴い、感覚と意志は思考を伴い、さらに感覚は—意識的な行動を伴うのである。意志の行動は常に感覚と思考に結びついている。流れるこの意識の活動の複合体は、同時に意識の状態を規定する。これらの意識の状態は、休むことなく変化している、何故なら意識の活動は間断なき活動状態にあるからである。<sup>28</sup>

意識の行動と同様に、通常は強化される方向へと絶えず変化している意識の規模は、意識の活動と状態の豊富さ、多様さ、深さによって規定されている。ここで筆者が取り上げているのは大主教ルカが魂について語っている部分であるが、重要な概念として靈が提示される。

意識の行動と状態を規定しながら、私たちの靈はつねにそこに参入している。つまり、靈は意識の働きによって、個々の意識の活動と状態によって成長し、変化しているのである。<sup>29</sup>

それでは魂とは一体何であろうか。大主教ルカによれば動物にとって魂とは自意識により統合された器官的感覚的な知覚、思考、感覚、想起の痕跡の複合体であるが、動物や低い次元に留まる人間においてはこの複合体への高次の靈の参入は必ずしも必要とされない<sup>30</sup>。低次元の存在であ

る動物の原始的な霊には、ただ生命体としての呼吸があるのみである。しかし、動物の霊は存在の階梯を上るに従い、その霊性を成長させ、生命の息吹は知性、意志、そして感情の萌芽に繋がっていく<sup>31</sup>。すなわち、被造生命体の頂点に立つ人間の魂には、高次の霊が参与しているのである。これらの主教ルカの霊・魂観には、低次元の存在から高次元の存在へという上昇・成長のイメージが強く打ち出されている。

キリスト教の教えでは、死する運命にある人間が神への敬虔な信仰を全うし、最後の審判において神に義とされれば永遠の生命を得る。本節の最後に、主教ルカの霊と魂の議論に出てきた人間の物質的な肉体ではなく、不死の霊的な肉体について触れておきたい。そのためには、「キリストの肉体」の考察が不可欠であり、これはロシア正教会の祝日において復活大祭（Пасха）が最も重要であることと関連する。<sup>32</sup>言が肉を纏ったのが神人イエス・キリストであるが、磔刑において人間としてのイエスの肉体は痛めつけられ、苛まれ、死に至った。復活大祭についての雑文を集めた霊的文献『祝日の中の祝日』（1993年）では、イエスは人間を愛するあまり自身が人間となり、人間としての生の困難さを分かち合い、いかに生きるべきかを人類に教導したと語られる<sup>32</sup>。ここには全人類の教師としてのイエス像も読み取れる。

そう、キリストは自分自身で、自身の神性の力によって、永遠に復活したのである。キリストの復活は、神と共にある生は死よりも強いことを示したのである。<sup>33</sup>

キリストは人々の罪のために死に、死者の中から復活したという、まさにそこにキリスト教の信仰、キリストの教会が基礎づけられた。<sup>34</sup>

イエス・キリストは、人類に救いに至る道を提示した。人間が彼の像に似る存在となり、キリストの神的な属性の全てに与るのが救済なのである<sup>35</sup>。キリストは、無実の罪で捉えられたが、苦悩の果てにその身を父である神に捧げ、十字架の上で死を迎えた。死は悪魔がはびこる冥府への参入を意味したが、キリストはその神性の力により「復活」する。

土曜日になり、夜のこと、自らの苦しみと死の後に主イエス・キリストは自身の神性の力により蘇った。イエス・キリストの肉体、人間としての本性（человеческое естество）は変容したのだ。（『偉大なる復活祭 祝日の中の祝日』2010年）<sup>36</sup>

人間を様々な罪へと誘惑する悪魔は、イエス・キリストを自分たちの側＝死の側に引き入れることは叶わなかった。復活により、イエスにおいては、人性と神性が完全に一致し、「死する肉体（人間の肉体）」は、「不死の肉体（神人の肉体）」へと変容を遂げた。イエス・キリストにおける「死による死の克服」は、以下のことを示している。すなわち、人間もまた、自らの身体を復活する肉体へと、不死の肉体へと変容させる可能性を秘めている、ということである。上に引用した『偉大なる復活祭 祝日の中の祝日』（2010年）では、復活大祭は全人類の祝日と位置付けられている<sup>37</sup>。イエス・キリストは復活の後昇天したが、それ以降は彼の弟子である使徒たちが教えを広めていったのである。それでは、彼らが地上にいない今、誰がロシア正教会の霊的な教師の役割を果たしているのだろうか。

#### 4. 長老たち（старцы）

ロシア正教会の霊的文献において、人間の「絶えざる罪との闘い」の指針として重要な位置を

占めているのが、東方正教会の聖師父たちに連なるロシアの「長老たち (старцы)」の教えである。聖書に通曉し、信者の司牧者となるのがキリスト教の聖職者であるが、「長老 (старец)」とは何であろうか。東方正教会における長老とは、様々な罪の誘惑に打ち克ち、心身を制御し、熟練した、靈的経験を積んだキリスト者に対する尊称である。「魂の教師」であるこの長老は、一般信徒に対しても信仰に関するものに留まらず、日常生活の具体的な諸問題について教導した。ロシア正教会の聖職者は妻帯を許された白僧 (белое духовенство) とそれを禁じられた黒僧 (черное духовенство) に分けられるが、長老の呼称は両者に冠せられ、女性も長老になりうる。彼らに共通するのは、聖師父たちの教えに準じているところだろう。靈的人間である長老は「天使 (ангел)」とも称されることがある。前節で取り上げた主教ルカは、以下のように述べている。

一連の地上の存在の中で、人間が最初にして唯一の靈的存在であり、そして人生においてほとんど肉体からの靈の解放に達した、靈性の非常に高い段階にある人たちがいた。これらの人々——天使たちは祈りの最中に空中に上り、肉体の上に靈の最も偉大な権力を発現したが (столпники, постники)、彼らは、肉体の無い靈 (ангел) に向かう、魂と肉体 (человек) に結びついた靈からの移行段階にあったのである。<sup>38</sup>

ロシア正教会における「長老制 (старчество)」とは、修道士たちの領域では靈的徒弟制度のようなものであり、一般の信者にとっては現代のカウンセリングのようなものであった。長老の称号は、教会の位階の範疇外にあり、長老制は、ロシアでは 19 世紀に隆盛を見た。それは、コゼーリスクのオープンチナ修道院において頂点を迎えたのである。当地の長老たちは、民衆と積極的に対話を行った<sup>39</sup>。オープンチナ修道院のアムヴローシイ・グレンコフ (1812-1891 年) に代表されるロシアの長老たちの熱心な活動は (彼らは民衆に対して僧房の扉を開いた)、ピョートル大帝による聖宗務院制度導入以降、俗権の管轄下にあった教会の靈性の復興を鼓舞し、ロシアにおける修道制の再活性化を促した。現在教会の売店では、長老制について述べた DVD も販売されており、視聴覚資料として有用である<sup>40</sup>。

長司祭アレクサンドル・ソロヴィヨフ (1870-1941 年) の『長老制：聖師父たちと禁欲苦行者たちのひそみに倣って』(2009 年) によると、キリスト教徒になったとしても、ただ一人の努力で靈性の高みに達するのは困難である。周りの人間たちと賢しらに聖書について議論するよりも、正教会の苦行者たちに関する文献を読むほうが役に立つという<sup>41</sup>。

そして、聖師父たち、経験を積んだ禁欲苦行者たちは、靈的な指導者の不可欠性について、事前のキリスト教教育の不可欠性について教えるのである。そう、それは自然なことなのだ：すべての人間は、すぐさま何らかの所与のものになるわけではなく、そうではなくて——人間はただ、自らの未来の「私」の胚芽を宿しており、初めは肉体的にも靈的にも赤子なので、キリストの年齢の大きくなるために、肉体的にも靈的にも見て分かるような年齢に、完全な人間にならなくてはいけない<sup>42</sup>。

亡命ロシア人聖職者サンフランシスコおよび西部アメリカの大主教イオアン (シャホフスキイ、1902-1989 年) の論文「靈的師父への従順について」(『靈の父に対する関係について』2003 年所収) によると、様々な誘惑に対して我意を滅却するためには、靈的経験の深い長老等の黒僧だけでなく、在俗の白僧の聴悔司祭に対しても、その助言に従うべきである。ただし、靈的師父の側に力量がなく、外面的な指導に終始するのであれば、靈的指導者を変えることも出来るとい

う。

靈的指導者への従順（*послушание*）は、「規律的なもの（*дисциплинарное*）」（軍務のような）であってはならず、靈的な生そのものに、靈的な（相互の）信頼に立脚したものでなくてはならない。<sup>43</sup>

靈的指導は、自意識を拒否した人間の意志を麻痺させるのではなく、この意志を強め、癒すのである…。靈的指導は意識の悪しき傾向を根絶するが、意識それ自体を消滅させるわけではない。靈的師父はただ必要な薬を勧めるだけであり、彼自身には薬としての力はない。<sup>44</sup>

神へ自分の意志を委ねることを望んでこそ、人間は自分自身を神とするために、ただ神の人（*Божий человек*）に自分の意識を預けることができるのである。<sup>45</sup>

ロシア正教会の靈的文献では、過去に行われた長老と悩める相談者のやりとりは、そのまま現在のロシアにも適用可能だとされている（人間の罪は普遍的であると考えられているため）。これが、オープン修道院の長老たちの言葉が信者の間で読み継がれている所以である。ここで現在のロシアにおける社会問題と関連して、一人の長老を取り上げたい。筆者が選んだのは、アルコール依存症をめぐる問題である。2016年、イルクーツクでは入浴剤等に使用されるローション「バヤールシュニク」の偽物をアルコールの代用品として飲んだ住民が、12月27日までに77名死亡するという事件があった<sup>46</sup>。ロシア人にとって「酩酊への渴望」は、今に至るまで深刻な精神的病理である。これに対して、靈的師父の言葉が小冊子のかたちで一般信者向けに刊行されている。『掌院ニーコン・ヴォロビヨフの手紙から：痛飲について』（2015年）は、逮捕され、収容所送りになった経験を有する旧ソ連邦時代の苦行者、スモレンスク州ガガーリンの<sup>イグーメン</sup>典院ニーコン・ヴォロビヨフが、アルコール依存症に苦しむコゼーリスクの公認会計士セルゲイ・マニエロフとその妻カーチャに宛てた書簡（1958-1963年）である。これは、聖書と聖師父の教えに通曉した正教会の靈的指導者がカウンセラー的な役割を果たしていたことの証左となっている。

典院ニーコン・ヴォロビヨフ（1894-1963）は聖なる人生を歩んだ人物であり、真の靈的指導者であり、入念に聖師父の伝統を学んだ修道士・苦行者であり、全力で師父たちの経験を己の苦行で実践しようとした人物である。師父ニーコンは、聖イグナティイ・ブリヤンチャニノフ（1867年没）の諸著作を、難解な聖師父たちの様々な著作を私たちの時代、19世紀の言葉に近いものに変換したものだと考えていた。ニーコン師父の方は、自身の手紙において、すでに全く理解可能な現代のロシア語によって、聖師父たちの教えを説いていた<sup>47</sup>。

セリョージャ、わたしは常にあなたのことを祈っています。私は、<sup>リトウルギヤ</sup>聖体礼儀の度にパンのかけらをあなたのために取り、そして神があなたを教え諭し、あなたが悲しみから解放されるのを助けるように祈ります。あなた自身はせめて少しでも闘うことだけをして、悪霊たちに手を伸ばさないようにしなさい。繰り返しますが、せめて一日に一度地面にひれ伏す礼拝でもって、神があなたの破滅を見過ごさず、無限の悲しみから救ってくださるように乞い願いなさい。自らを憐れみなさい、カーチャを憐れみなさい。あなたはかつて彼女を愛していたのではないですか。おそらく、今だって愛しているでしょう。彼女を悩ませていることが残念ではないのですか？もしも神に対して、自分の罪を赦せ、とあなたがいらだっている時は、

カーチャに赦しを乞いなさい。あなた自身が自分の隣人と平和な状態でないのなら、どうやって神と和解するのですか？

自分がいかによからぬことを起こそうとも、失望しないでください。輝ける瞬間に、神に祈りなさい、彼はあなたを助け、全てを赦してくださいます。セリョージャ、正気になって、自分自身を憐れみなさい！私たちのところへやって来てください。ここでは懺悔も出来ますし、聖体を拝領することも出来ます。教会に通い、<sup>ドゥホーヴニエ・クニギー</sup>靈的な本を読むのです。休暇をとり、一人でも、カーチャと一緒に、あなたの都合に合わせて、やって来なさい。<sup>48</sup>

悪霊どもにとってあなたを奈落へ突き落とすことなど造作ありません。もしもどうしても飲酒がやめられないのなら、自宅で飲みなさい、カーチャを悲しませてはなりません。飲み始める前にせめて1・2秒でもいいから祈りを捧げよう言いなさい。「主よ、私は自分の力でウォッカを我慢することは出来ません。今飲み始めます、酔っ払います、おそらく、妻に悪態をつき、罵ることでしょう。主よ、可能でしたら、私を抑えてください、あるいは、再び酔っ払う私をお赦しください」。このように祈っている時に、いつもより少なく飲むように努力してください。<sup>49</sup>

飲酒の欲求があなたを強く引きつけた時は、地面に平伏する礼拝を三回行い、こう言いなさい。「主よ、私の頹廢ぶりが再び私を飲酒へと駆り立てています。私は耐えられません、耐える力がありません。もしあなたがお慈悲をくださるのなら—私に抑制する力をお与えください。もしも私が、これについて、あなたの助けに値しない、というのであれば、その時私の身体器官は悪霊どもから大きな損害を被ります、もしも飲んでしまうのなら」。もしもあなたが、いつもの大酒の前に謙りでもって主にこのように懇願するのなら、主である神はあなたへ抑える力をくださいます。しかし、もしもあなたが再び他の人々を糾弾するのなら、あなたはまた悪霊たちの手に委ねられてしまうのです。

私は病んでいます。これ以上書くことができません。私のために祈ってください。カーチャに挨拶と祝福を。<sup>50</sup> (『掌院ニーコン・ヴォロビヨフの手紙から：痛飲について』(2015年))

手紙の主である典院ニーコンは、20世紀後半、ソ連邦時代に没した人物であるが、聖師父の教えやロシアの聖人たちの教えを継承し、彼の教えは現在の正教徒の抱える問題にも有効とされている。この小冊子から読み取れるのは、アルコール依存症は外在する悪霊の誘惑だということである。人間はそれ自身では無力で罪深いため、敬虔な祈りによって悪霊から己が身を防御する必要がある。掌院ニーコンは1963年に没したが、この書簡が交わされた当時はまだ精神医学が発達しておらず、当著では「依存症」が脳の器質的な障害ではなく本人の意思の問題とされている(アルコール依存症は飲酒のコントロール障害であり、「節酒」は不可能、「断酒」によるソブラエティのみが唯一の回復方法である。「断酒」もまた、本人の努力・忍耐のみでは不可能)。掌院ニーコンの『痛飲について』は現在の精神医学とは全く対応していないが、アルコールをめぐる聖職者と一信者の交流の瞬間が焼き付けられていて興味深い。やはりロシア正教会における長老は、一般信徒の苦悩に寄り添う魂の同伴者なのである。

## 6. おわりに

以上のように、本稿ではロシア正教会の宗教的啓蒙文献＝靈的文献における人間観を考察した。そこに描かれていたのは、自然科学等が提示するものとは異なった人間存在である(外科医であつ

た主教ルカは、医学・生理学の知識を「援用」している)。ロシア正教会の靈的文献においては、人間は進化したただの有機生命体などではなく、神の栄光を分かち合うものとして創造された被造物であった。墮罪により人間は死すべき存在に成り果てたが、肉を纏った言<sup>ロゴス</sup>、全人類の教師たるイエス・キリストの贖罪により自らの肉体を不死のものへと方向づける可能性を享受したのである。人間は創造主である神、救い主である神の他者として存在し、また、神は人間の他者として存在する。このように、人間存在を理解するためには神が必要であり、存在としての神を理解するためには人間が必要とされるのである。

教会の領域では、福音書におけるイエス・キリストの言葉や聖師父たちの教えは、常に変転する世界にあっても現代人に適用可能な言<sup>ロゴス</sup>の宝物とされている。悩み苦しむ人々への処方箋として、長老たちの言葉は朽ちることなく息づいているのである。本稿で扱った靈的文献の幾つかは、手帳、あるいはそれよりも小さなサイズのものであったが、敬虔な信者にとってはそれが言<sup>ロゴス</sup>の花園<sup>51</sup>になる。ロシア正教会の靈的文献において人間に課せられているのは、日常生活の中で大小様々な罪と闘い、唯一絶対自立存在者である神に対して、靈的師父に対して、従順(послушание)の姿勢を示すことであった。そこで提示されているのは、神を措定することによって浮き彫りになる人間存在の意義に対する一つの宗教的な回答なのである。

## 註

- 1 *Священник Константин Пархоменко*. Знакомьтесь : Православие. Издательский Дом «Нева». СПб., Издательство «ОЛМА-ПРЕСС». 2002.
- 2 このことは無論、ロシア人から東方正教を摂取した日本ハリストス正教会においても同様である。司祭エフレム後藤悠太「アダムの罪、ハリストスの復活～聖師父に学ぶ～」『2014年冬季セミナー講演録 神の国への旅』西日本主教教区、2015年参照。
- 3 Сопресвитеру Тимофею пресвитер Дионисий. О церковной иерархии. Издательство «Псалтирь». Тула. (出版年無記載)
- 4 Иже во святых отца нашего аввы Исаака Сирина, подвижника и отшельника, бывшего епископом христоролюбивого града ниневии. Слова подвижнические. М., 2006.
- 5 *Иоанн Дамаскин*. Три слова в защиту иконопочтания. Издательский Дом «Азбука-классика». СПб., 2008.
- 6 *Преподобный Симеон Новый Богослов*. Главизны. Благодарения. Диалог со схоластиком. 1999. (出版所および出版地無記載)
- 7 *Священник Константин Пархоменко*. Знакомьтесь : Православие. С.5.
- 8 「すなわち、それらを神の臨在の場とし、神の意志と力が宇宙に広がるようにし、すべてを神の樂園に存在するように変容するということです。」トマス・ホブコ著、ダヴィド水口優明訳『正教入門シリーズ1 正教要理』西日本主教教区、2012年、42頁。
- 9 *Преподобный Иустин (Попович)*. Путь богопознания. Гносеология святого Исаака Сирина. Свято-Елисаветинский монастырь. Минск. 2003. С.4.
- 10 См.: Пространный христианский катихизис Православной Кафолической Восточной церкви (Наставления в Православной вере, необходимые всякому христианну) / Сост. *Святитель Филарет (Дроздов)* митрополит Московский и Коломенский. Издание Свято-Успенского Псково-Печерского монастыря. М., 1823; 1998.; *Святитель Филарет*, митрополит Московский и Коломенский. Пространный христианский катихизис Православной Кафолической Восточной церкви. Издательство сибирская благовонница. М., 2005. (初版は1823年、本稿では1998年、2005年に刊行されたものを用いた。以下同様。) また、別の聖職者の手による<sup>カチヘーゼス</sup>教理問答も参照した。Прот. Николай

- Вознесенский*. Сокращенный Православный Христианский катихизис. Спб., 2003.
- 11 *Святитель Филарет*, Пространный христианский катихизис Православной Кафолической Восточной церкви. 1998. С.30.
- 12 本稿では、聖書は新共同訳を用いた。
- 13 *Святитель Филарет*, Пространный христианский катихизис Православной Кафолической Восточной церкви. 1998. С.31-35.
- 14 *Трояновская Е.* Вступление. Все связано со всем // Закон Божий. Основы православной веры в изложении для детей. R.V.R. Нью-Йорк. М., 1991. С.6. 次のものが子供向け以外の参考文献である。*Профессор императорского юрьевского университета, протоиерей Арсений Царевский*. Уроки по закону Божию. Фонд ИВ. М., 1886-1887; 2009.
- 15 *Священник Константин Пархоменко*. Знакомьтесь. С.21.
- 16 命名行為によって世界を認識するという考えには、20世紀前半のロシア宗教哲学者たちの讃名論に通じるものがある。
- 17 *Священник Константин Пархоменко*. Знакомьтесь : Православие. С.25-26.
- 18 *Протоиерей Андрей Ткачев*. Религия сердца. Воздвижение Николин день. М., 2015. С.99
- 19 Там же.С.99-101.
- 20 イエス・キリストの復活より 50 日目に聖霊が使徒たちに降った。「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、<sup>20</sup>聖霊が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。」(使徒 2:1-5)
- 21 *Архиепископ Лука (Войно-Ясенецкий)*. Дух, душа и тело. ТЕРИРЕМ. Казань, 1973; 2017. С.14-15. ここで大主教ルカの言う「エネルギー (энергия)」とは、アリストテレスのエネルゲイア概念とも、静寂主義における神の働きかけであるエネルゲイアとも異なる。
- 22 *Архиепископ Лука (Войно-Ясенецкий)*. Дух, душа и тело.С.15.
- 23 Там же.
- 24 Там же. С.103-104.
- 25 Там же. С.110.
- 26 Там же. С.107.
- 27 Там же. С.51.
- 28 Там же. С.86-87.
- 29 Там же. С.87.
- 30 Там же. С.88-89.
- 31 Там же. С.87-88.
- 32 Праздников праздник. Православный сборник о Пасхе. «МОЛОДАЯ ГВАРДИЯ». М., 1993. С.13.
- 33 Там же.
- 34 Там же.
- 35 トマス・ホプコ『正教入門シリーズ1 正教要理』、43頁。
- 36 Великая пасха. Праздник праздников. «Вече». М., 2010. С.20.
- 37 Там же. С.22.
- 38 *Архиепископ Лука (Войно-Ясенецкий)*. Дух, душа и тело. С.162.
- 39 オープチナ修道院関連の靈的文献は夥しい数に上るため、ここでは幾つかを挙げるに留める。*Поселянин Е.* Оптинский старец иеросхимонах Амвросий. Издательство «Живоносный источник». М., 2001; *Тортенстен Т.В.* Наследник оптинских старцев. Воспоминания о преподобном Севастиане Карагандинском. М., 2001; *Великий старец Амвросий оптинский*. Житие Наставления Молитвы.

- Издательский дом «ФАВОР-XXI». М., 2002; Оптинские старцы о молитве Иисусовой. Не оставляй Божественной молитвы. М., 2005.
- 40 *Епископ Василий (Родзянко)*. О старчестве (On the Holy Elders). Университет Натальи Нестеровой. Студия учебно-просветительских фильмов (DVD).
- 41 *Протоиерей Александр Соловьев*. Старчество по учению святых отцов и аскетов. Свято-троицкая Сергиева Лавра. 1900; 2009. С.24.
- 42 Там же. С.34-35.
- 43 *Архиепископ Иоанн Сан-Францисский (Шаховский)*. О послушании духовнику // Об отношении к духовному отцу. Святые отцы древности и современные пастыри о духовничестве, старчестве, послушании. Составители: священник *Сергий Фиоимонов*, *А.Н. Новиков*. САТИС ДЕРЖАВА. Спб., 2003. С.63.
- 44 Там же.
- 45 Там же.
- 46 『朝日新聞』 2016年12月28日。
- 47 Из писем игумена Никона (Воробьева). О пьянстве. Православное братство святого апостола Иоанна Богослова. М., 2015. С.2. (『北東アジア研究』第30号、島根県立大学北東アジア地域研究センターに全訳を掲載予定。)これは、А.И. Ошпобф編集の「掌院ニーコン・ヴォロビヨフの手紙より」シリーズの一冊であり、他にも次のようなものがある。Из писем игумена Никона (Воробьева). Духовник. Православное братство святого апостола Иоанна Богослова. М., 2015.
- 48 Из писем игумена Никона (Воробьева). О пьянстве. С.17.
- 49 Там же. С.31.
- 50 Там же. С.34-35.
- 51 Цветник духовный. Назидательные мысли и добрые советы выбранные из творений мужей мудрых и святых. Репринтное издание. Издательство Владимирской епархии при участии Церкви Рождества Пресвятой Богородицы. 1903; 2009.